

** 寺田寅彦、松根東洋城生誕 140 年 **

鎌倉漱石の會

新宿区立漱石山房記念館、くまもと漱石倶楽部
一般財団法人 子規庵保存会

高知訪問記念

寺田寅彦と高知 案内



大野良一 作 寺田寅彦の頭像

2018 年（平成 30 年）10 月 25 日（木）

寺田寅彦記念館友の会

1. 寺田寅彦にとっての夏目金之助

夏目漱石の死去は大正 5 年 12 月 9 日である。死因は胃の病気であるが寅彦も胃潰瘍で寝込んでいて葬儀に参列できなかった。寅彦が漱石を慕うあまり病気までも感応しているのである。この年の日記に歳晩所感として、「夏目先生を失ふた事は自分の生涯に取って大きな出来事である。」と書いている。

大正 6 年 1 月 10 日の桑木或雄宛て書簡には次のようにある。

夏目先生が亡くなられてからもう何処へも遊びに（純粹な意味で）行く処がなくなりました、小弟の廿才頃から今日迄の廿年間の生涯から夏目先生を引き去つたと考へると残つたものは木か石のような者になるように思ひます、不思議な事には私にとっては先生の文学はそれ程重要なものでなくて唯の先生其物が貴重なものでありました。

寅彦は「夏目漱石先生の追憶」で熊本第五高等学校での出会いから漱石の死による別れまでを順を追って情緒的に描いている。

この「追憶」については書かれた時期に注意したい。これは昭和 7 年 12 月に発表されたもので、漱石の死後 16 年である。（また自分の死の 3 年前になる。）師について書くためにはこれだけの時間経過が必要だったのである。

漱石の俳句（明治 32 年、寅彦が熊本五高を卒業する年）

寅彦桂浜の石数十顆を贈り来しに
涼しさや石握り見る掌
送別
時くれば燕もやがて帰るなり

2. 寺田寅彦と松根東洋城

寅彦は早い時期には俳句、後半は連句に熱中した。小宮豊隆、松根東洋城との鼎談による「俳句を通しての漱石先生の研究」を楽しみ、筆記を東洋城主催の俳誌『渋柿』に連載している。また同じ三人で連句の実作に励み（豊隆が仙台に赴任してからは二人）、同誌に発表している。多くは金曜日の夕方、銀座や新宿のレストランで行われ、10 年以上続いた。東洋城はこの思い出を繰り返し書いて、寅彦の「まぼろし」を見たこともあった。

コーヒーはブラツクにして苺かな（城）

3. 中谷宇吉郎の見た高知における寺田寅彦の顕彰

漱石の一番弟子が寺田寅彦ならば寅彦のそれは中谷宇吉郎である。昭和 32 年に高知で刊行された『寺田寅彦郷土随筆集』の表紙に宇吉郎の文章が引用されている。

寅彦の遺跡は、建物や銅像の形ではなく、人々の心の中にある。寅彦の郷土随筆集の編集の方たちと、まる一日車を走らせたが到るところで、若き日の寅彦の像がこの人たちの頭の中に蘇ってくるのに、むしろ驚嘆の念を禁じえなかった。

高知城の石垣のほとりには「花物語」の昼顔が今日もやはり咲いている。小学生の寅彦が「母にねだって蚊帳の破れたので作った」捕虫網を肩にして、この城山の奥の、苔むした石段を下って来る。常山木の幹でとらえた見事な兜虫はいかめしい角を立てて虫籠の中にいる。そして美しい蝙蝠傘をさした母子に会うのは、この石段の下である。

街を一步出ると、青田がずっとつづいている。そして、「冬夜の田園詩」に民族的記憶の名残を止めた「キータヤマ・ヤーケタ」の北山が、その向うに、昔ながらの姿を見せている。

「竜舌蘭」の家は、今は全く昔の面影もないそうである。唯一つ残っているものは、病身の寅彦が「体が段々落ちて行くような何とも知れず心細い気が」して眺めた「天井に吊るした金銀色の蠅除け玉」だけである。しかし寅彦を愛する人たちには、この蠅除け玉が一つ、昔のままに天井から吊り下がって居れば、それですべてが残存しているのである。

こういう遺跡は、永くは残らないかもしれない。しかし、千万斤の石で作った遺跡とて、同じことである。(百日物語)

4. 寺田寅彦記念館友の会について

1994年(平成6年)年初頃から友の会発足準備

同年5月1日 会報『榭』第1号発行

同年5月20日 友の会発足(2018年は24年目)

会の目的: 寺田寅彦の人と作品を研究し、会員相互の研鑽と親睦を深め、高知県の教育・文化の向上に寄与するとともに、寺田寅彦記念館の機能を援助し、運営に協力することを目的とする。

現在の会員数約130人(約半数が高知県内者、残りが県外者) 年会費2,000円

活動内容

年1回の総会、年2回の研修会(主に講演会)

会報『榭』の発行(年間3回程度) 最新号は83号(2018年9月)

『榭』合本で第20回寺田寅彦記念賞を受賞(2001年(平成13年)1月)

伊東喜代子さん著『寺田寅彦先生と私』発刊(伊東さんは記念館の管理・案内担当)

寺田寅彦の銅像を建てる会との協力(銅像は新図書館北側に設置、2018年7月24日除幕)

寺田家墓所清掃活動、理科教育の推進と援助及び広報活動、寺田寅彦記念館管理業務受託など

5. 寺田寅彦ゆかりの地

高知には寅彦の作品に登場する処を含めてゆかりの地は多い。市内中心部から近くて何か記念になる施設等がある場所として次の7ヶ所がある。

5-1 寺田寅彦記念館(寺田寅彦邸址)



元の屋敷は父・利正が明治13年頃購入したもの。敷地は西側のマンションの一部まで広がっていた。また建物は全部で100坪を越えていた。

寅彦は1878年（明治11年）11月28日、東京市麹町区平河町五丁目で生まれている。軍人である父の熊本転任に伴い1882年（明治15年）に母、姉と共にこの家に引っ越してきた。

1885年（明治18年）父の東京転任に伴い一家で上京したが1年程で戻り、1896年（明治29年）9月に熊本第五高等学校へ入学するまでここに住んだ。その後は帰省地であったが1913年（大正2年）8月、父・利正の死により母と娘を東京に引き取った。

1945年（昭和20年）の空襲で離れ（勉強部屋）を残して焼失。1949年（昭和24年）西隣にあった別役駒（寅彦の長姉）の家を移築し、寺田寅彦記念館とする。1952年（昭和27年）11月牧野富太郎筆「寺田寅彦先生邸址」の石碑除幕。1977年（昭和52年）茶室復元完成。1984年（昭和59年）10月母屋復元完成。

「庭の追憶」より

「秋庭」という題で相当な大幅である。ほとんど一面に朱と黄の色彩が横溢して見るも眩しいくらいなので、一見しただけではすぐにこれが自分の昔馴染の庭だということが呑込めなかった。しかし、少し見ているうちに、まず一番に眼についたのは、画面の中央の下方にある一枚の長方形の飛石であった。

この石は、もとどこかの石橋に使ってあったものを父が掘出して来て、そうして、この位置に据えたものである。それは自分が物心ついてから後のことであった。この石の中程にたしか少し窪んだところがあって、それによく雨水や打水が溜って空の光を照り返していたような記憶がある。しかし、ことによるとそれは、この石の隣にある片麻岩の飛び石だったかもしれない。それ程にもう自分の記憶がうすれているのは侘しいことである。（略）

このただ一枚の飛石の面にだけでも、ほとんど数え切れない喜怒哀楽さまざまの追憶の場面を映し出すことが出来る。夏休みに帰省している間は毎晩のように座敷の縁側に腰をかけて、蒸暑い夕風ぎの夜の茂みから襲ってくる蚊を団扇で追いながら、両親を相手に色々の話をした。そのときにいつも眼の前の夕闇の庭の真中に薄白く見えていたのがこの長方形の花崗岩の飛石であった。

ことにありあり思い出されるのは同じ縁側に黙って腰をかけていた、当時はまだうら若い浴衣姿の、今はどうの昔に亡き妻の事どもである。 （昭和9年6月）

5-2 城西公園 花物語（昼顔）文学碑

1990年（平成2年）に高知ペンクラブ創立20周年記念として設置された。「花物語 昼顔」の最初の部分が旧漢字、旧かな遣いで彫られている。

花物語 寺田寅彦

いくつ位の時であつたかたしかには覚えぬが、自分が小さい時の事である。宅の前を流れてゐる濁つた堀川に沿うて半町位上ると川は左に折れて舊城の裾の茂みに分け入る。その城に向うた此方の岸に廣い空地があつた。維新



前には藩の調練場であつたのが、其の頃では縣廳の所屬になつたまゝで荒地になつてゐた。一面の砂地に雑草が所まだらに生ひ茂り處々晝顔が咲いてゐた。「晝顔」より

冒頭の「いくつ位の時であつたか」は初出のホトトギス掲載の時には無く、『藪柑子集』に再録する時の校正で追記されている。

5-3 高知市立江ノ口小学校 寺田寅彦顕彰碑

寅彦が熊本の五高に出した入学願書によると 1884 年（明治 17 年）2 月、この小学校に入学し、途中 1 年程の東京移住（番町小学校）を挟んで 1888 年（明治 21 年）に卒業している。ただし、場所は寅彦が通った時代からは移っている。（当時は現在の江ノ口市民図書館の北側あたりにあった。）



（顕彰碑の裏側）

明治六年中水道に設立された志穀舎を前身に旧百軒町を経て現地に至る 学ぶ者一万余名 茲に創立百周年を記念し卒業生中の偉材寺田寅彦をその象として顕彰以て本校の榮譽を讃え永く後輩立志の灯とする

昭和四十九年三月九日

高知市立江ノ口小学校創立百周年記念事業実行委員会
監修 大野龍夫 撰文 西本靖生 設計塑像 横矢勝
製作 寺尾晴俊 題字 福原云外

5-4 小津神社 奉納の石燈籠と石橋

この神社は寺田家の氏神であり、境内に寅彦の父・利正が肺を患った息子の病氣平癒を祈願し、成就後、願ほどきのために奉納した石燈籠がある。別に奉納した石橋も残っている。また東側の玉垣には寺田寅彦と深く刻まれている。

燈籠の刻印

奉獻 寺田利正 男 寅彦

明治二十五年六月日

石橋の刻印

寺田利正男寅彦 明治廿七年十月

吉祥日



5-5 寺田寅彦墓所

この墓地には寅彦、父と母、3人の妻が眠っている。寅彦の墓には小宮豊隆撰文の墓誌が彫られている。また父・利正の墓にも漢文の墓誌がある。利正と寅彦の墓は同じ大きさ、女性4人も同じ大きさのようである。

左から紳⑥、寛子③、夏子①、寅彦⑤、(写っていないが) 亀④、利正② (○数字は亡くなった順序)

現在、配置を見ると自然な感じがするが、亡くなった順序からして最初からこのような場所どりを考えていたのだろうか?とってしまう。

寺田家の祖先の墓所はこの山の峰向うに別にあるが、この墓所を新しく切り開いて夏子の墓を設置したのは父の利正である。



「自由画稿 十七 何故泣くか」より

以下はある男の告白である。

「自分が若くて妻を亡(うしな)ったときも、ちっとも涙なんか出なかった。ただ非常に緊張したような気持ちであった。親戚の婦人たちが自由自在に泣けるのが不思議な気がした。遺骸を郊外山腹にある先祖代々の墓地に葬った後、生ま生ましい土饅頭の前に仮の祭壇をしつらえ神官が簡単なのりとをあげた。自分は二歳になる遺児を膝にのせたまま腰をかけてそののりとを聞いていたときに、今まで吹き荒れていた風が突然風(な)いだかのように世の中が静寂になりそうして異常に美しくなったような気がした。山の樹立(こだち)も墓地から見おろされる麓の田園も折りから夕暮の空の光に照らされて、いつも見慣れた景色がかつて見たことのない異様な美しさに輝くような気がした。そうしてそのような空の光の下に無心の母なき子を抱いて俯向(うつむ)いている自分自身の姿をはっきり客観した、その瞬間に思いもかけず熱い涙が湧くように流れ出した。」

これは昭和10年5月、『中央公論』に掲載されたが、この年の大晦日に寅彦が亡くなっていることが何か暗示的である。いつまでも最初の妻・夏子が心に残っていたのである。

5-6 高知県立文学館

県立郷土文化会館を改装して1997年(平成9年)11月2日に高知県立文学館が開館した。ここに寺田家から寄贈された品々を中心に展示した寺田寅彦記念室がある。科学者である寅彦を紹介する科学実験ビデオ「渦巻きの実験」「地滑りの実験」「割れ目と生命」は必見である。

一般展示は土佐日記の紀貫之から黒岩涙香、上林暁、大町桂月、森下雨村、大原富枝、安岡章太郎、吉井勇、片山敏彦、清岡卓行、倉橋由美子、宮尾登美子、有川浩、山本一力など非常に多

彩で、模様替えなどで苦勞されているようである。

過去の寺田寅彦関連企画展
(前史)

高知県立歴史民俗資料館(南国市岡豊)での開催

- ① 1991年(平成3年)第1回 寺田寅彦展—内なる世界の具現—
- ② 1992年(平成4年)第2回 寺田寅彦展—科学とその周辺—



高知県立文学館での開催(寺田寅彦記念室は常設展示)

- ① 1997年(平成9年)
開館記念特別展「師弟が見た近代—漱石と寅彦の留学体験—」
- ② 2002年(平成14年)開館5周年記念 寅彦と宇吉郎の絵画展
- ③ 2002年(平成14年)寺田寅彦展—天然(てんぜん)に生まれし眼差し—
- ④ 2007年(平成19年)「寺田寅彦の描いた花々」展
- ⑤ 2009年(平成21年)寺田寅彦—手のぬくもり展
- ⑥ 2015年(平成27年)親愛なる寺田先生—師・寺田寅彦と中谷宇吉郎—
- ⑦ 2018年(平成30年)寅彦先生に学ぶ天災展 天災は忘れられたる頃来る

5-7 寺田寅彦銅像(オーテピア北側敷地内)

高知は銅像の多い土地柄である。幕末から明治初期の動乱期に活躍した人物が多いことも原因であろう。有名なところで坂本龍馬(桂浜)、中岡慎太郎(室戸岬)、板垣退助(高知公園)、牧野富太郎(五台山・牧野植物園)、ジョン万次郎(足摺岬)などが思い浮かぶ。この度、その仲間に寺田寅彦が加わった。平成26年9月から翌年12月まで地元の企業・個人を中心に全国から募金を集めて出来たものである。

地元・高知の彫刻家、大野良一氏(新制作協会会員)が足掛け5年をかけ、研究を重ねて寅彦らしい表情をもつ、親しみやすい像が完成した。寅彦には椿の落花状態を研究した専門の論文があるが、像は右手に椿の花を持って、「ねえ君、不思議だと思いませんか」と語りかけているポーズである。この言葉は台座正面に彫られている。

左右には「天災は忘れられたる頃来る」とローマ字で下記の短詩が書かれている。

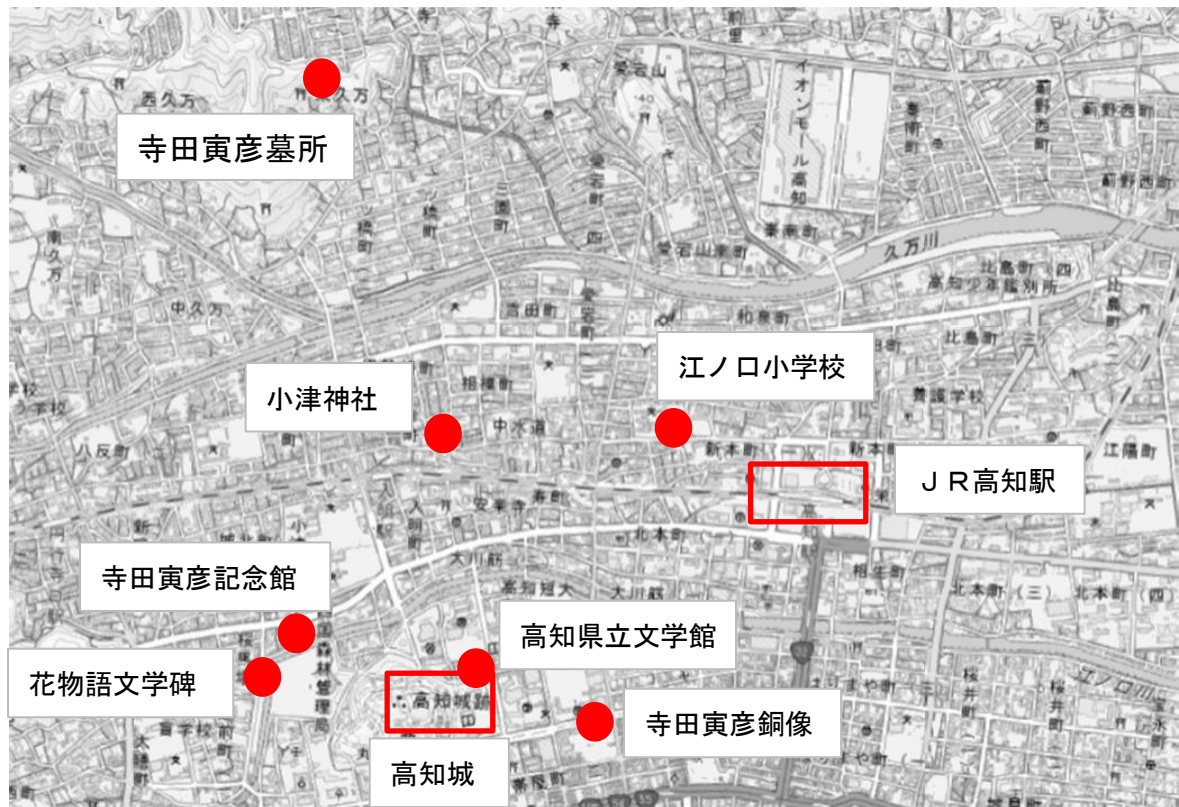
Sukina Mono Itigo Kōhī Hana Bizin Hutokorode site Utū Kenbutu
1934.I.2

(好きなもの 苺 珈琲 花 美人 懐手して宇宙見物)



- ・高さ 1.3m の台座の上で右手に椿の花を持っている。
- ・丈の長い外套が寒がりの寅彦らしい。
- ・寅彦の視線の先には、母校・高知県尋常中学校の
後身である高知追手前高等学校がある。

6. 寺田寅彦ゆかりの地の位置関係（上が北、国土地理院地図による）



寺田寅彦記念館から墓所まで直線で約 1.5km。